

老健 みんなの笑顔

「2015年の施設設立の歯科医師・歯科衛生士らに呼びかけ、「口から食を食べる」を大事にし、当する歯科医師が月1回摂食嚥下リハビリに積極的に取り組む方針が明確だった。最初から看護士と管理栄養士、言語聴覚士によるチームが存在していました」

こう話すのは、東京都練馬区の介護老人保健施設「みんなの笑顔」(医療法人社団川満恵光会、川満正夫理事長、入所100人、通所60人)の言語聴覚士・守谷ゆみえさんだ。入所者が自宅へ帰る割合が最も高い「超強化型老健」。建物2・3階の居室フロアには、それぞれ機能訓練室と食堂があり、生活の中でリハビリとケアを一体的に提供している。

力を入れている摂食嚥下リハビリでは、歯科治療や口腔ケアを専門とする



利用者の周りに複数の専門職が集まりミニカンファレンス

週4回行っているが、この機動的な5分程度のミニカンファが連携には重要と理学療法士でリハビリ課長の白井麻里さんも話す。

入院期間の短縮により、病気の治療が終われば即退院、リハビリ病院も終り直接老健に入所す

専門職の視点を持ち寄って 利用者の「困った」を解決

る利用者も少なくない。しかし、急性期病院では基本的には安静にし、十分な食事もとれないケースもあるため、入所時点で栄養状態が良くない利用者がいるという。

「日本リハビリテーション栄養学会の若林秀隆医師が提唱された『栄養ケアなくして、リハな

左から看護課長の五十嵐さん、リハビリ課長の白井さん、管理栄養士の渡邊さん、言語聴覚士の守谷さん



なかったで、口から食べるならばと入れ歯を製作。最終的に自分の口で、普通食を3食食べられるまで改善したという。

「何で食べられないんだろ」という視点で同じ利用者さんを見ていても専門職で見え方がまったく違います。その違う見方を持ち寄って話し合い、一緒に取り組んで解決できたときは本当にうれしい」(言語聴覚士・守谷さん)

リハビリや栄養改善を通じて全身状態を良くすることが、例えば「自宅へ帰りたい」という本人の希望の実現や、胃ろうの受入れに人数制限のある特養や有料老人ホームへの入所につながるようになる。

「みんなの笑顔」の取り組みを話してくれた皆さんの様子から、現場の雰囲気の良いことが伝わってきた。多職種連携のポイントを尋ねると、看護課の五十嵐留美課長は「一つ挙げるとしたらあいさつも含めた声かけを積極的にやっている点ですね。声かけの習慣がある」と、「ちょっと困っている」と言いやすくなる。職種間の垣根を下げることにつながっていると思えます」(守谷さん)。